Learning Support Center 広島修道大学 学習支援センター

LSC NEWS LETTER

2020 No.31

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

アドバイザー三人寄れば… … 1　コロナ禍におけるフォローアップ面談 … 2　英語多読マラソン完走者インタビュー … 4　学生の学び … 5
LSC ドキュメンタリーアワー報告 … 6　LSC 資料紹介 … 7　＜学び★サプリ＞デザイン＝センス …？・大学教育学会第 42 回大会参加報告 … 8

アドバイザー三人寄れば…

○ 学習パートナー　是澤 克哉

三人寄れば…と問われたら、「文殊の知恵」を思い浮かべる方は多いと思います。これは「愚かな者、平凡な者も三人集まって相談すれば文殊菩薩のようなよい知恵が出るものだ」（広辞苑第七版）という良くできた言葉です。「愚かな者」という表現は必要かどうか分かりませんが、たとえば、学習アドバイザーが三人集まって、修大基礎講座の教案やスタディグループについて話し合ったら、意外と良い案が出てきたものでした。

今年度、同僚のアドバイザーたちと三人で教育談義を交わしたことが懐かしく思い出されます。たとえば、英語の education が「引き出す」という意味を語源として持っていることばだと述べると、日本語の「教」の字は「土の上に子どもが座り、教師が鞭で打つ」という語源があるという展開になり、英語の education と日本語の「教育」を同じ文脈で使ってよいものだろうかといった問いが出たこともありました。すぐにどんな鞭で罰を与えていたのか、教師こそ罰を与えられるべきでは？などの話に取って代わってしまいましたが。こういった雑談には、いくつかの遊びと教育のヒントが隠されていたように思います。

奇しくも本学に着任した2016年度前期と退職する2020年度後期はアドバイザーが二人体制でした。二人だと、仕事量が増え、余裕がなくなり、創造性がどうしても欠けてしまいます。仕事の効率を重視するあまり、遊び心が失われてしまうからです。学習アドバイザーが仕事を楽しめなければ、学習相談に来る学生たちが学びに楽しみを見つけられるはずはありません。加えて、今年度は新型コロナウイルスによる感染症の問題が、大学全体を覆ってしまい、学生たちの大学生活を営む上で欠かせない、出会い、集い、語らう自由が奪われてしまいました。当然、サークルなどの課外活動が真っ先に制限され、遊び場を取り上げられた学生たちは、自分たちの拠り所を失くしてしまったようにみえました。

このような状況の中で、気づかされたことがあります。それは、仕事の効率性の重視や緊急事態で奪われてしまった「遊び心」や「遊び場」は、学ぶ上で最も大切な要素ではないかということです。遊びは自由で、自発的な活動です。学習は遊び心がなければ、単調でつまらないものに変わってしまい、遊び場がなければ、語らう仲間と出会えずにずっと一人です。学習支援センターは学生たちに、学びの「遊び心」と「遊び場」の両方を提供することができるセンターです。しかも、学習アドバイザーという遊び相手が三人も（現在は二人）いて、学びの遊び心を刺激し、まなびコモンズという遊び場に誘います。そこで遊び仲間を見つけ、協働する力をつけたのを見届けて、遊びは終わります。ここまで書くと、もはや学びと遊びの区別がつかなくなってしまいましたが、それでいいのです。もともと、たいした違いなどないのですから。

そのため、私は、ずっと「アドバイザー」や「先生」と呼ばれることが苦手でした。なぜなら、遊び場に先生がいたら、自由に遊べなくなってしまうから。しかも、いたずらもできない。だから、最後に肩書きを「学習パートナー」と変えさせていただきました。それは私自身も学生の学ぶ姿勢から多くのアドバイスを与えられてきた一人であるからです。

学習支援センターの「遊び場」は、協創館という建物の中にあります。子どもは、そんな名前がなくても、楽しい遊びを自分たちで考えて、仲間を誘って一緒に遊ぶものです。けれども、一緒に遊べない学生や大人たちが最近増えているようにみえます。多様性を大学で学ぶのは、自分と考えの異なる人たちの意見を尊重するためです。学習支援センターは、そんな学びの「遊び心」と「遊び場」の領界を守りつつ、それらを幅広く提供する使命があります。それは自分たちの存在を肯定することにつながります。来年度は、学習アドバイザーが三人揃います。学生たちが、まなびコモンズで多くの新しい出会いに恵まれることを期待してやみません。

コロナ禍におけるフォローアップ面談

― 例年との比較分析 ―

学習支援センターでは、2015年度新入生から、前期末と学年末に単位僅少となった学生に対して「フォローアップ面談」を実施しています。この面談は、各学部・学科で決められた単位僅少の基準により面談指導が必要と判断された学生について、２年次前期までに問題点の把握と学習支援を行うことで、主体的学習者へ導き学修状況を改善すること、またその結果、休退学を防止し、卒延率を下げることを目的としています。

現在この面談を実施している学部・学科は、商学部、人文学部（教育学科・英語英文学科）、法学部、経済科学部、人間環境学部、国際コミュニティ学部の６学部10学科です。

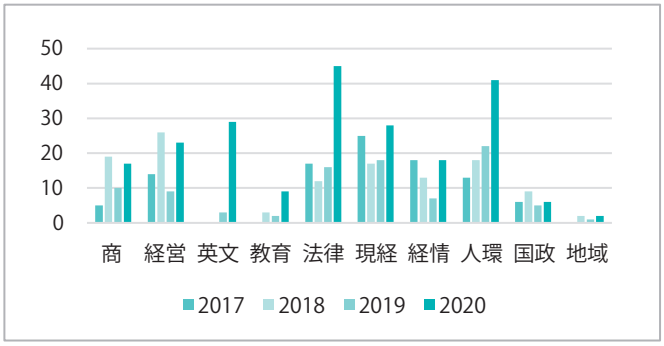
例年は、対象の学生にまず個別に連絡し、日程を調整したうえで、30分程度対面での面談を実施していますが、今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、例年通りの面談実施は困難でした。そのため、まず対象者全員に質問形式のメールで聞き取りをしたのち、取得単位数が10単位未満の学生及び面談を希望した学生に対して、電話もしくは対面で１回目（前期末）のフォローアップ面談を実施することとしました。

以下は、その内容と近年の面談実施状況、そしてそれらを基にした考察です。

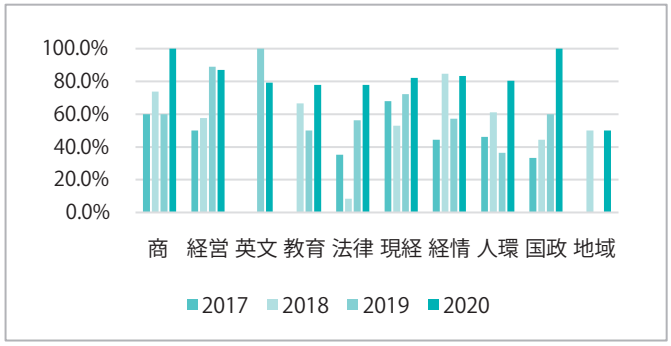
◆１回目（前期末）フォローアップ面談実施状況

【表１】2017～2020年度の単位僅少者数と実施率

	17生（2017年度）	18生（2018年度）	19生（2019年度）	20生（2020年度）
実施人数／対象人数	48名／98名	68名／119名	55名／93名	180名／218名
実施率	49.0%	57.1%	59.1%	82.6%



【図１】学科別対象人数の推移



【図２】学科別実施率の推移

【表２】20生面談実施状況

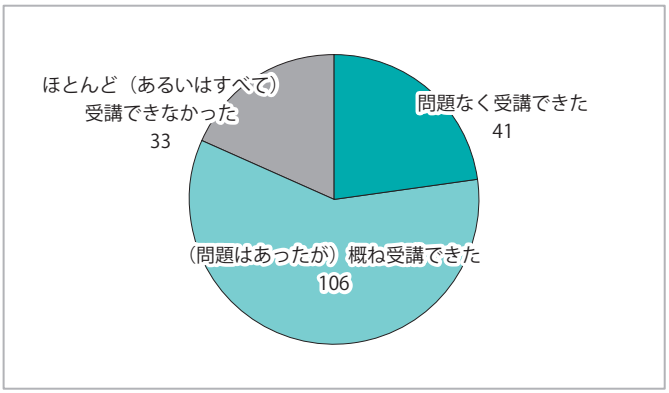
学部	学科	単位僅少者数	面談実施者数			面談実施率
			メールによる回答	電話	対面	
商	商	17	5	10	2	100%
	経営	23	16	3	1	87.0%
人文	英文	29	12	6	5	79.3%
	教育	9	4	0	3	77.8%
法	法	45	27	6	2	77.8%
経済	現経	28	18	1	4	82.1%
	経情	18	11	0	4	83.3%
人環	人環	41	17	6	10	80.5%
国コ	国政	6	5	1	0	100%
	地域	2	0	1	0	50.0%
全体		218	115	34	31	82.6%

【表３】20生10単位未満の内数

単位僅少者数（10単位未満）	メールによる回答	電話	対面	応答なし
11	0	10	1	0
9	5	2	0	2
12	0	6	3	3
4	1	0	1	2
14	2	6	1	5
8	1	1	3	3
7	1	0	4	2
21	3	6	7	5
5	4	1	0	0
2	0	1	0	1
93	17	33	20	23

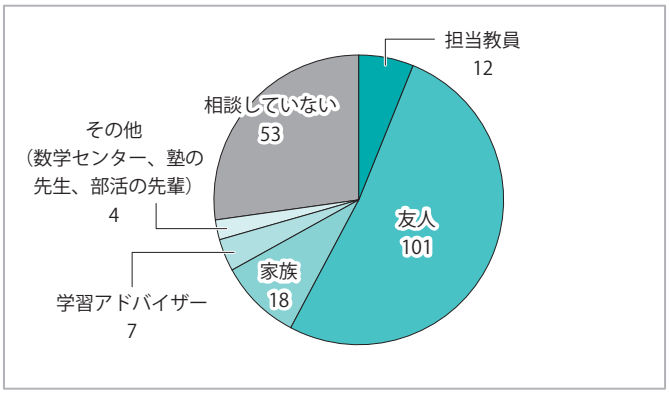
◆メールによる質問の回答

（人）



【図３】前期の遠隔授業の受講状況

（人）



【図４】授業で不明な点を誰に相談したか（複数回答）

【表４】単位を取得することができなかった原因の上位回答のみ抜粋（複数回答）　（人）

やり方（受講方法・学習方法・オンラインでの提出方法）が分からなかった（理解できなかった）	43
オンライン授業による学習意欲の低下（モチベーションの維持・集中）・やる気が出なかった・あきらめた	30
情報収集・確認（授業時間や課題の提出日など）ができていなかった	24
オンライン授業をさぼってしまった・忘れていた・出遅れた	19
オンライン授業がわかりにくかった・難しかった	16

◆面談（聞き取り）内容

表１にあるように、面談対象者数は17生98名、18生119名、19生93名に対し、20生は218名で、例年のおおよそ２倍の人数となっています。この要因としては、法律学科と英語英文学科の単位僅少の基準が変更になったことも一因ですが（図１）、それ以上に新型コロナウイルス感染拡大の影響により、入学してから数回しか大学に来ることができず、大学の対面授業を一度も経験しないまま非対面授業に臨んだことが要因と思われます。表４にもありますが、未修得の主な理由は、「やり方（受講方法・学習方法・オンラインでの提出方法）が分からなかった」、「オンライン授業による学習意欲の低下（モチベーションの維持・集中）・やる気が出なかった・あきらめた」、「授業時間や課題の提出日などが確認できていなかった」などでした。入学したばかりで Moodle、Google Classroom、Google Meet、Zoom など複数の遠隔授業支援ツールも理解できないまま授業がどんどん進み、課題もたまり、結果、オンライン授業に精神的にも疲れてしまい、授業を受けるモチベーションを徐々に喪失したこと、また、どこから情報を得ればよいのか、わからないことを誰に聞いたらよいのかすらわからなかった、という状況がうかがえました。

図４では、授業で不明な点を相談した相手は「友人」が一番多く、「誰にも相談しなかった」学生が53名（約30％）もいたこと、担当教員に相談できた学生が12名しかいないことからも混乱した様子が見て取れます。

また、問い合わせたにもかかわらず明確な回答を得ることができず彷徨ってしまった学生もおり、何かできるサポートが他にもあったのではないかと感じました。

◆まとめ

フォローアップ面談は、１年次生が大学に入学して初めて成績表を見て自分自身を振り返り、今後の大学生活で自分がすべきことを再考するよい機会といえます。今回は、メール・電話・対面という３つの形で実施しましたが、大学に入って初めての授業を遠隔で受講せざるを得なかった１年次生の想いを少しでも拾うことができたのではないかと思います。面談の中で、後期に向けての目標ややるべきことについても聞いたところ、皆一様に「単位をとる」とあげていて、そのためには、「情報を収集して、余裕をもってスケジュールを組み、やるべきことはまず先にする」というように、前期の反省を踏まえた意見が多くありました。面談をきっかけにして、レポートの書き方、大学での学びの進め方、英語・TOEIC 等の勉強の仕方などの学習相談につなげた学生もいます。

まだ収束を見ないコロナ禍の中、学習支援センターでは、Zoom･電話･メールを使った遠隔での学習相談やワークショップなど、自宅からでも学べる学びのきっかけ作りにも取り組み、さらに指導教員や教学センター、学生センターなどの他部局とも連携を図りながら、学業面・生活面の両面から単位僅少学生のサポートを行っていくために、今後もフォローアップ面談を実施していきます。

英語多読マラソン 完走者インタビュー

学習アドバイザー　是澤 克哉

４年間で421,950語の英文を読むことを目標に掲げ、継続的な多読学習を英語担当教員（ロナルド、岡田）、図書館（吉川、門脇）、学習支援センター（森河、津原、宮原、是澤）の三者協働で支援する英語多読マラソンは今年で４年目を迎えました。まなびコモンズには、421,950語をマラソンのコースに置き換えたマップが掲示されており、参加者はマグネットに自分のキャラクターシールを貼ったコマで、読了した語数から１万語ごとにマスを進めていきます。今年度は新型コロナウイルスの影響で、新規の参加者が減りましたが､その中で見事完走した学生が現れました。

今回、ゴールしたのは健康科学部心理学科２年の大久保由紀さん。彼女は、2018年度に100万語を達成した田中彩季さん、2019年度の沖原万柚子さんに続く３人目の完走者となりました。12月17日に表彰式を兼ねて、インタビューを行いましたので、彼女の喜びの声と共にその一部をお届けします。

是　澤：ゴールした今の率直な感想をお聞かせください。

大久保：一年生の６月から始め、最初は４年間で完走しようと思っていたら、いつの間にか多読の魅力に惹かれていました。通学時間が長く、毎日コツコツ読んでいたのですが、特に早く終わらせようとも思っていなかったので、「終わってしまった！」と驚いていることが、率直な感想です。

是　澤：今回の完走は、岡田先生の授業の支援もあったと聞きました。先生からメッセージをいただけますか。

岡　田：大久保さんは前期の授業を履修していて、初めから、「ん？この学生は何か違う」と思っていました。最初は多読をしていたことは知らなかったので、毎週の読んでくる語数に驚きました。そこで尋ねると「実はすでに多読を始めています」といわれ、納得することができました。クラスでも一番語数を読んでいました。完走まで一直線で走り続けることは難しいのですが、大久保さんが感じた多読の魅力はどこにあったでしょうか。

大久保：一番の魅力は本の内容です。外国のスクールライフを知り、そこで異文化に触れ、読んでいて楽しめました。英語多読マラソンの魅力としては、協創館の前にマップがあり、スタンプをもらいに行くたびに見ていて、周りの人の進み具合が視覚的に分かり、「頑張らなければ」というのがありました。一人というよりは、他の参加者と一緒に切磋琢磨しながらやっていることが感じられたので、そこが一番の魅力だと感じました。

岡　田：他の学生の存在、一緒に頑張れているという感覚が役立ったということでしょうか。

大久保：そうですね。岡田先生の授業でたくさん読めたと思って、後期にマップを見に行ったら、自分より読んでいる人がいて、それがすごくショックだった。読んだつもりだったのに、２万語も差をつけられ、これで負けていられないと火が付いたのを覚えています。

是　澤：岡田先生が紹介した本が楽しかったと聞きました。

大久保：私が30万語を越えた２年生の後期に入ってから、先生とお会いする機会があり、そこで Cambridge シリーズを勧められ、図書館で借りて読み始めたのですが、今まで読んだ本の内容と、面白さのレベルが違っていました。起承転結があり、ほとんどがミステリーや推理小説のような作品が多いですが、想像しながら、日本語の小説を読む感覚で読めたので、おすすめだと思いました。

森　河：他の英語学習に波及効果がありましたか？

大久保：１年生の時は英語の文章を見た瞬間に拒絶反応があったのですが、それが全くなくなりスラスラ読めるようになったことを記憶しています。

吉　川：もともと英語がお好きだったのですか？

大久保：はい、好きでした。実は高校でも多読をやっていました。それで入学後の６月に是澤さんに多読やってみないと誘われ、「あ、高校の頃にやっていました」という感じですんなりと入っていくことができました。

門　脇：紙と電子の本で読んでいて違いがありましたか？

大久保：それぞれ魅力がありました。多読の本は、普通より薄いので、紙の本は持ち運びに便利でした。４冊ぐらい借りて、通学時に読めるのが魅力です。電子の本は、再生ボタンがあり、そこを押すと、機械が読み上げてくれます。抑揚や単語の意味もすぐに分かることが魅力です。

津　原：今度引っ越しされると聞き、確定した読書タイムが無くなることを危惧していますが､何か考えていますか？

大久保：本当は冬休みや春休みにも読んでいきたいのですが、対面授業が始まり、通学できるようになったら協創館１階で読むか、または、非対面授業でも図書館のオンライン書籍を利用したいと考えています。

津　原：友人に多読を勧めるとしたら、どんなことを良さとしてアピールしますか。

大久保：私は日本語の本も読むことが苦手だったのですが、英語の多読学習用の本は短いので、飽き性の人でも最後まで読みやすいということを伝えたいです。

大久保さん、完走おめでとうございます。次の完走者は一体誰になるのか、皆さんの挑戦をお待ちしています。

学生の学び

学習支援センターでは、大学での学びをサポートするものとして、学習相談やワークショップ、スタディグループなどの学びの機会を提供しています。これらに、複数回参加している学生は、自身の学びのサイクルに取り入れ、成長しています。
今回は、４人の学生の声を紹介します。

レポートの書き方が分かった！

宮本 楓
（商学部商学科　１年）

私は学習支援センターの利用を通して、レポートの書き方を習得することができました。コロナウイルスの影響で学校に行けなくなってしまった中、私はレポートの書き方が全く分からずとても不安でした。そんな時に、遠隔で学習相談が行われていることを知りました。学習相談では、とても丁寧に分かりやすくサポートしていただいた為、参考文献の書き方や文章構成の仕方など、レポートの知識を身につけることができました。私は文章を書くことに苦手意識を感じていましたが、そんな私でもレポートを書くことができるようになり自分の成長を感じることができました。より良いレポートが書けるように、今後も学習支援センターを利用していきたいと思っています。

私のように文章を書くことが苦手な人や、レポートの書き方が分からないという人は是非、学習支援センターの利用をお勧めします！

ディベート＊私＞グラハム数

渡邉 伊織
（人文学部英語英文学科　３年）

ディベートクラブに参加して２年が経ちます。様々な社会問題を議論することで、関心がなかったニュースや話題を積極的に吸収、考えるようになりました。大会に参加して他大学のディベーターとの実力の差に落ち込む日も多々ありましたが、みんなで一つの目標に向かって努力したこと、失敗から学んだことはかけがえのない財産です。

私にとってディベートは「ロジカルに自分で考える」を試行錯誤できる場です。それが日々の勉学で実践できています。ディベートは学歴も出身も関係なく、自分の思考力と言葉だけで通じ合える最強のコミュニケーションだと思います。その議論の数だけ、先生方や他大学の学生さんなど、たくさんの良い出会いにめぐり合えました。支えてくださっている皆さんに感謝し、これからも議論の幅を広げていこうと思います。

自分のペースで学べる場所

濱島 杏佳
（人文学部英語英文学科　１年）

私は学習支援センターの学習支援の中で主に TOEIC 対策のスタディグループに参加しています。私がこのグループの存在を知ったのは入学してから少し後で、１年生の夏から参加しました。最初は、途中参加であるため学習の遅れや、雰囲気に馴染めるかが心配でした。しかし、講師の方も参加されている皆さんも優しい方で、私を気持ちよく受け入れてくれ、学習も個人に合わせて進めて頂けたので安心して参加することができました。

学習支援センターで行われているイベントの魅力は、アットホームな所だと思います。「スタディ」や「ワークショップ」と聞くと少し抵抗があるかもしれませんが、実際は講師の方と距離が近く、講義のように堅苦しくないので楽しく勉強できます。質問しやすい所も魅力の一つです。

TOEIC の傾向や解くコツなど楽しく学べるので、私のような人見知りの方もぜひ気軽に参加してみて欲しいです！

自分の表現力を高められる場

徳毛 優希
（人間環境学部人間環境学科　４年）

私は、学習支援センターを利用し、自分の考えを文章に表現し、伝える力が高められたと思います。

以前の私は文章を書くことが苦手でした。しかし、小さい頃からの夢である消防士になるには、良い論作文を書く必要がありました。そこで、消防士試験に合格した先輩から勧められ、学習支援センターの学習相談を利用し始めました。自分で過去問題や類題を見つけ、ほぼ毎日書き続け、学習アドバイザーに見ていただきました。相談では、文章構造についてわかりやすく説明していただいたり、問題に対する自分の考えを聞いてもらい、それが論作文に表現し切れているかなど、しっかり見ていただきました。その結果、消防士試験に無事合格できました。

論作文試験だけでなく、大学の課題レポートなどにも活かせる文章表現力が高められる場所だと思います。ぜひ利用してみてください。

第71回 LSCドキュメンタリーアワー報告

『朋の時間』と『普通に生きる』
―「母たちの季節」から「自立をめざして」へ―

学習アドバイザー　是澤 克哉

第71回は、12月４日に人文学部の堀田哲一郎先生による解説を交えながら、『朋の時間』と『普通に生きる』を視聴しました。『朋の時間』は、1986年に横浜市に設立された重症心身障がい者通所施設「朋」について、それまで在宅か入所施設かという二者択一しかなかった制度を、母親たちの熱意で切り開いていく親・支援者・当事者の地域相互の絆を描いた作品でした。

続く『普通に生きる』は、2004年に静岡県富士市に設立された「でらーと」という通所施設における親と子の「自立」に焦点が当てられ、親と子は一心同体という考えが当然ではなく、別々の人間であることが、「普通」であることを訴えた作品でした。これら二つの映像を比較しながら、障がい者支援の意義や動向を学びました。

視聴後、海外における障がい者支援の現状や、学生に何を望むか、といった質問がありました。堀田先生は、日本の障がい者支援は海外と比べると遅れていることを指摘し、特別な隔離された環境を設定して障がい者の発達を健常者が保障してあげるという発想は、当事者が望んでいることではなく、同じ社会のなかに生きて、共に助け合うことが当たり前である意識を持てるような、余裕のある社会にしていくことが望ましく、それが「普通」である社会であってほしいと話されました。

堀田先生は、特別支援教育の専門家で、今回は、「自立」が大きなテーマとなりました。それを踏まえ、２月８日に対談を行い、「合理的配慮」や「支援の在り方」について掘り下げてうかがいました。その対談の一部を掲載します。

是澤：学習支援センターでもいわゆる合理的配慮が必要な学生の支援が増え、どう進めたらよいか、戸惑うことが多いです。先生はどのように対応されてきましたか。

堀田：先日、卒論の発表会で、障がいのある子どもにどう関わったらよいかという議論がありました。教員の立場では、何でもやってあげ過ぎてはだめ、という流れに自然となってくる。ただ、本人がどの程度できるか、その見極めが難しい。どこまでができて、どこまでが手を貸したらよいか、日頃から対話ができていれば、その判断ができるのですが。

是澤：大学として障がい者問題を考えたときに、個人の問題にさせないことが大切です。社会から障害を与えられているとの認識を深めるにはどうしたらよいでしょうか。

堀田：合理的配慮には、過重な負担にならない範囲があります。学生が望む支援と大学の出来る支援には限界があり、学生にその努力をどこまで見せてあげられるかで納得してもらうしかありません。この前あった話で、配慮の必要な学生が職員から「あなた、困っていないんじゃないの？」と言われたことがありました。成績が良いからだと思われますが、それは学生が努力しているという個人の問題です。

是澤：関係性が築けていれば、ある程度の問題は納得してもらうことができると思うのですが、その学生の場合は配慮が足りていなかったように映ります。

堀田：差別解消法の改正で、受け入れる側に努力義務があります。当事者に努力を求めるのではなく、関係性の中で、大学側もできる限りの支援をし、学生側も精一杯自分の出来ることをする。言いたくないことをさらけ出さずに過ごせるような配慮が必要です。このような反応を見ているとセクシュアルマイノリティとの共通点も多くあります。

是澤：個人によって支援の仕方を変えるべきでしょうか。

堀田：やはり、変えるべきでしょうね。受け止め方はそれぞれ違うので、聞きながらやらざるを得ない。本人が気にせずに関わりを持つだけの関係性を築けるかどうかが、支援では大切になってきます。

最後に堀田先生は、できるだけ当事者の声を反映してもらえるような大学であって欲しいと訴えました。今後も多様性をテーマに、多様であるとはどういうことかを考えていきたいと思います。

LSC資料紹介≫

学習アドバイザー　是澤 克哉

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を収集しています。
教職員には貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センター（協創館１階）までお問い合わせください。

読書について悩みを抱えている方は実は多いのではないでしょうか。「最近、本を読まなくなった」と考える人は、もしかしたら、読まなくなったのではなく、読めなくなったのかもしれません。そこで、今回のLSC資料紹介では、読むという学びの基本的な行為に焦点を当てた２冊を紹介します。

≫『「読む」って、どんなこと？ ―「わたし」の言葉で考え抜け―』

高橋 源一郎著（2020）／NHK出版

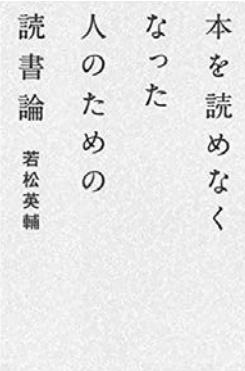
読み方を教える本は多々あれど、読めないことを前提に読むことを教えてくれる本はあまりありません。本書は、「読む」とはどのような行為か、その本質に迫ります。

まず、題名しかない詩を引用し、この白紙をどのように読めばよいかを問いかけます。題名の情報を知っている場合と知らない場合とでは、解釈は大きく異なります。しかし、両者の読みに正誤はあるのでしょうか。この詩を翻訳した筆者は、異なる解釈に出会った際には、「へええ！そんな読み方があったのか。ありがとう、素敵な『読み』を教えてくれて（p.９）」と答えると書いています。この力の抜け具合が絶妙で、読めないことに恥じることなく、読み進めることができます。

そして、読むうちに不安になり、読んでいることを隠したくなる、できたら近づきたくないような文章だけが、読者を変える力を持っている「いい文章」だと断言します。後半では問題山積みの「いい文章」を矢継ぎ早に紹介していくのですが、この論旨展開が実に明解です。著者の解説で難解な文章に対し、素敵な読み方を教えてくれます。解釈は自由であって良いと思わせてくれる読書の本です。

≫『本を読めなくなった人のための読書論』

若松 英輔著（2019）／亜紀書房



題名の通り、本を読めなくなった人に向けられた内容となっています。私もそうですが、読書に対して「たくさん読まなくてはならない」や、「最後まで読み切らなければならない」といった固定観念があります。本書は、そういった不安を上手く和らげてくれる一冊です。著者は、「読めないときは、無理をして読まなくていい。読めない本にも意味があるから、積読でもいい」と待つ読書にも意味があると励ましてくれます。そして、読む人を勇気づける言葉と出会うためにする読書を提案します。その根底にある考えは、そもそも読書とは、いつどこからでも始めてもよい自由な行為であるという哲学です。読むことに疲れてしまった方、迷いが生じてしまった方に、読書の楽しみ方を教えてくれる一冊です。

上記の本における読書の共通点は、正しい読み方や唯一の解釈など存在しないということです。また、良い本に出会うことは、良いことばと出会うことでもあると述べられています。本を読めとはよく言われるけれど、その読み方まで指南してくれる本は少ないです。読書に悩む方にとって、上記の２冊は、読書の幅と自由度をあげてくれるものとなります。

＜学び★サプリ＞

2020 Vol.19

デザイン＝センス …?

学習アドバイザー　宮原 千咲

「デザイン」と聞いて、何を思い浮かべますか？「センス」という言葉がすぐに思い浮かび、何やらきれいでかっこいいものをイメージする人が少なくないと思います。そして、良いデザインは、センスが良い一部の人しか持ち得ないものだと考える人も多いのではないでしょうか。

そもそもデザインとは、目的のための計画そのものを指します。これは、ラテン語の“Designare”（計画を記号に表す）に由来するとされています。日本デザイン振興会ではデザインを「常にヒトを中心に考え、目的を見出し、その目的を達成する計画を行い実現化する」と定義しています。言い換えると、デザインは具体的な問題を解決するために思考・概念の組み立てを行い、それを様々な媒体に応じて表現することになります。このように、デザインとは見栄えの良さなどの表面的なものではなく、本質的な活動なのです。

デザインを具現化・実現化する際にはセンス以外の他の力も求められます。技術や知識、想像力、経験、コミュニケーション力、理解力などです。たとえば、あなたがイベントのポスターを作成することになったとしましょう。あなたに、センスがあったとしても、編集用ソフトを操る技術やデザインの理論などの知識が無ければ、良いポスターをデザインすることができません。逆に、あなたにセンスが無かったとしても、コミュニケーション力が高く、そのポスターの目的をよく汲み取れたり、理解力が高く、宣伝の意図を正しく理解できたりすれば、良いデザインのポスターができる可能性はあります。センスなどの感性の部分で人より不足があったとしても、それ以外の力を行使してデザインを良くすることはできるのです。このように、複数の力を総合して、デザインとして実現化となります。表出までには、様々な技術や知識が必要なのです。

普段行っている活動においても、その実、技術や知識、多くの力が下支えになっています。表面的なものに囚われるのではなく、その本質を捉え、着実に確実な力をつけていきたいものです。

参考：日本デザイン振興会
https://www.jidp.or.jp/ja/about/firsttime/whatsdesign

＜学び★サプリ＞は学習支援センター掲示板で読むことができます。

大学教育学会第42回大会参加報告

宮原 千咲

2020年６月６日（土）、７日（日）に、統一テーマ「未来に挑戦する大学」で開催された大学教育学会第42回大会に参加しました。今大会は、新型コロナウイルス感染予防のため、大学教育学会初のオンライン開催となり、基調講演とシンポジウム、オンライン可能なラウンドテーブル（以下、RT）のみの実施となりました。今回は、基調講演、シンポジウムと２つのラウンドテーブルに参加し、本学の初年次教育や学習支援に有益な知見を得ることができました。ここでは、シンポジウムと RT の一つを紹介します。

シンポジウム「未来に挑戦する学生を育てる教育環境整備」では、大会テーマを受け、どのような教育環境を整えるべきかについて、三名のパネリストから講演と報告がありました。特に興味深かったのは、社会から求められている素養を身につけるには正課だけでなく準正課、正課外での活動が重要であり、自発的に選べる環境が必要であるという要点の報告です。本学でも、正課ではないところでの教育的な取り組みは行われており、精力的に活動する学生は大勢います。より効果的な仕掛けの作り方を考えるにあたり、正課以外の枠組みを捉え直し、他大学の具体的な取り組みを知ることは、学習支援として大いに参考になります。

RT「初年次教育への組織開発的アプローチとその結果 ― いかにモチベーションに働きかけるのか ―」は、入学した大学での学びの動機が弱い学生が増えているという現状を受け、主体的・対話的で深い学びを円滑にするため、教育内容や方法、ツールではなく関係性の改善（チームビルディング）に焦点を当てた研究と実践の報告です。結果を改善するために行動を変えるのではなく関係性の改善に解決の糸口を求める考え方は非常に興味深いです。「修大基礎講座」のような初年次教育科目の内容改善を図る際、一つのアプローチとして考えられると思います。チームビルディングを丁寧に行えば、人とのつながりを実感し、学びのモチベーションが上がり、かつ、安心できる学びの場となるでしょう。2020年度はオンライン授業が多かったため、特に、意識的に行う必要性を感じました。

今回参加して得た知見を学習支援センターの取り組みに活かし、学生に還元していきたいと思います。

Hiroshima Shudo University
LSC NEWS LETTER Learning Support Center
広島修道大学 Hiroshima Shudo University
発行日 2021年３月31日
発行者 広島修道大学学習支援センター
〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1-1-1　TEL.(082)830-1426
E-mail skill@js.shudo-u.ac.jp
◎LSC NEWS LETTER は大学公式WEBサイトでもご覧になれます。